

『宇宙のたくらみ』

J. D. バロー著、菅谷暁訳／みすず書房

理系の人間は、因果関係が好きだ。通信ネットワークを専門とする僕も、当然理系の人間であり、原因と結果を見比べて、そこに潜む仕掛けを発見すると感動を覚える。空はなぜ青いのか、火はなぜ熱いのか。現象自体よりもその理由や仕組みがどうしても気になる。ここで紹介する『宇宙のたくらみ』は、そんな仕掛けマニアな理系の人々におすすめの一冊である。

本著では、宇宙論学者 J. D. バローが、我々人類の中に組み込まれた壮大な仕掛け(=宇宙のたくらみ)を様々な面から解き明かしており、当時大学院生だった僕は、一節読み終わる毎に「なるほど」と頷かされた。なかでも印象に残るのは、クラシック音楽の芸術性に関するくだりだ。芸術家は自由な発想のもとに音楽を紡ぎますが、多くのクラシック音楽の旋律には、1/f ゆらぎと呼ばれる一定の法則性がある。この1/f ゆらぎは、次の音が適度に予測可能であることを意味するのだが、おどろくべきことにこの法則性は、小川のせせらぎや林を駆け抜ける風の音と共通なのである。我々人類の祖先がまだ樹上生活を営んでいた頃、小川のせせらぎは命をつなぐ水の存在を示し、風の音は身を隠す木々の存在を示していた。1/f のゆらぎの旋律は、人類にとって安全を示す旋律であり、この旋律を心地良いと感じない種は自然淘汰の過程で減ってきたのであろう。見方を変えれば、我々がクラシック音楽を美しいと感じることは、クラシック音楽が生まれるはるか以前から仕組まれていたということである。

クラシック音楽の例に限らず、本著では宇宙によって仕組まれた仕掛けが多数登場する。我々人類を規定する体格、ライフスタイル、風習、社会性といった様々なものは、宇宙が生まれた時から決められた法則によって支配され、さらに感性や美的感覚といった主観的なものとされるものでさえ、多くの部分が実は制限されている。本著を読んだ後は、壮大な仕掛けの中の人類という存在を改めて認識して、不思議な感覚になる。

理系の巣窟たる技大には、数多くの仕掛けマニアが潜在していることと思う。ぜひ本著を手にして、宇宙によって仕組まれた壮大な仕掛けに触れてほしい。

執筆者紹介

渡部 康平

電気電子情報工学専攻助教。専門領域は、通信ネットワーク、ネットワーク計測。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『宇宙のたくらみ』 J. D. Barrow著 菅谷暁訳 みすず書房 2003年 6,480円

[ブックガイド目次へ](#)